

関西学院大学 研究成果報告

2023年 5月 12日

関西学院大学 学長殿

所属：人間福祉学部
職名：准教授
氏名：茨木正志郎

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	英語史における後置属格の発達について
研究実施場所	研究室
研究期間	2022年 4月 1日 ~ 2023年 3月 31日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究は、英語史における後置属格の出現と発達のメカニズムについて明らかにすることを目的としている。後置属格には、不定冠詞を伴うもの（例：a friend of his）と指示詞を伴うもの（例：that dog of yours）がある。所属を表す前置詞のofとhisやyoursなどの所有代名詞が含まれるこの構文は、1つの名詞句の中に属格が二重表されており、この構文の出現と発達については昔から研究の対象となってきた。申請者はこれまで、不定冠詞を伴う後置属格に限定して調査を行い、得られた結果を考察し分析を行ってきたが、指示詞タイプのものについてはまだ手を付けていなかった。このような研究背景にあって、本研究では、もう1つの指示詞を伴う後置属格について調査・分析を行い、不定冠詞を伴う後置属格の研究と併せることで、後置属格の発達の全体像を明らかにすることを目指した。

後置属格を扱った先行研究にGaaf (1927)やHatcher (1950), Allen (2002)などがあり、それらによれば、不定冠詞を伴う後置属格の方が指示詞を伴うものより歴史的に早い時期に出現していると述べている。まずは、この歴史的事実を確認するために、史的コーパスPPCME2, PPCEME, PPCMBEを用いて調査を行った。そして、ここでのコーパス調査で明らかになった指示詞を伴う後置属格の分布と、Ibaraki (2020)の不定冠詞を伴う後置属格のコーパス調査の結果と比較した。その結果、指示詞の後置属格が現れたのは1450年ごろで、これは不定冠詞の後置属格よりも100年遅く出現したことがわかった。ま

た、指示詞の後置属格が一定数観察されるようになるまで発達するにはさらに200年ほど後の1650年ごろであることも明らかになった。

次に、指示詞の後置属格の起源について考察した。Jespersen (1927)やHeltveit (1969)などの先行研究では、後置属格は二重決定詞(例: a his friend / that his word)とよばれる構文から発達したと主張している。特にHeltveit (1969)は、後置属格は二重決定詞構文が構造再編成(structural reorganization)とよばれる変化を経て出現したと主張している。本研究でもJespersen (1927)とHeltveit (1969)に従って、二重決定詞構文から後置属格は発達したという仮説を立てた。この仮説を検証するために、再度史的コーパスを用いて、二重決定詞構文の史的分布を調査し、先の指示詞の後置属格の分布と比較した。ここでの仮説が正しければ、後置属格が出現して一定数が観察されるようになる1450年~1650年あたりに、二重決定詞構文の数も減少するというような、2つの構文の間に相関関係が観察されることが予想される。実際に、コーパス調査から得られた結果を比較したところ、二重決定詞構文は中英語後期にあたる1350年ごろから観察されはじめるが、1650年ごろから急速に減少し、1700年以降はほとんど観察されなくなっていることがわかった。これは、二重決定詞が減少し始めた時期と後置属格の数が一定数観察されるようになった時期は1650年前後でほぼ一致しており、この調査結果は二重決定詞から後置属格が派生したという構造再編成の仮説を支持するものである。

史的コーパスを使った調査より、二重決定詞から後置属格が派生したという仮説が支持されることが分かったので、次にどのような構造変化を経て後置属格が出現したのかについて考察した。考察を行う際の理論的枠組みとして、本研究では、生成文法のミニマリスト・プログラムの方針に基づいて、構造分析を行った。具体的には、まず、den Dikken (2006)のRelator Phrase (RP)の構造を採用し、すべての叙述関係は機能主要部R(elator)がその指定部と補部を結びつける構造において、統語的に表示されると仮定した。ここでの主要部Rは抽象的機能範疇であり、指定部と補部に入る2つの要素の叙述関係を仲介するあらゆる機能主要部のためのプレースホルダである。また、den Dikken (2006)では、RPは位相(phase)であると仮定されている。また、属格付与に関しては、Ibaraki (2010)に従って、古英語から初期中英語にかけては、Chomsky (1986)の一様性の条件(Uniformity Condition)に従い、属格名詞は主要部名詞から θ 役を受け取る際に内在格を付与されいたが、中英語の後期に入ると、属格名詞の屈折接辞-esがD主要部を占める格付与となり、属格名詞に構造格としての属格を付与するようになることと仮定した。den Dikken (2006)とIbaraki (2010)を採用し、英語の属格名詞句の構造は、D主要部が補部にRPをもつDP構造であるとした。

ここでの名詞句構造に基づくと、二重決定詞の構造は次のようになる。つまり、D主要部に指示詞が、RP指定部に所有代名詞が、そしてRP補部に主要部名詞が位置する構造である。RP補部の主要部名詞が、一様性の条件に従って、内在格としての属格をRP補部の所有代名詞に与え、派生は収束する。しかしながら、属格付与が内在格から構造格へ変化すると問題が生じる。つまり、一般的な属格名詞句の派生においては、主要部名詞から内在格をもらえなくなった所有代名詞は、DP指定部へ繰り上がり、D主要部にある格付与子-es接辞から構造格としての属格を受け取るようになる。一方、二重決定詞構文では、D主要部を指示詞が占めおり、指示詞は属格付与することができないので、所有代名詞が格を受け取ることができず、派生が破綻してしまう。このように、格付与の問題が起こったために二重決定詞構文は消失したと考えられる。

さらに本研究では、属格付与の問題のために、二重決定詞は派生が破綻するようになったが、同時に、この問題を解決する派生が出現したと仮定した。具体的には、二重決定詞の構造から、主要部名詞が倒置によって所有代名詞の前に移動することで属格を受け取るというものである。den Dikken (2006)によれば、RPを含む構造で倒置が起こる際には、機能範疇Linkerが導入される。Linkerがあるおかげで、R主要部がL(inker)主要部に繰り上がって位相を拡張し、さらにその指定部をRP補部の着地点として提供する。主要部名詞はLinkerの指定部に移動し、ofとして具現化されるL+Rという複合的主要部から属格を受け取ることで派生が収束する。この結果、主要部名詞-of-所有代名詞という後

置属格が派生されるようになったと分析した。

最後に今後の課題として、不定冠詞を伴う後置属格と指示詞を伴う後置属格の意味の違いがどのように説明されるのかという問題が残る。また、指示詞を伴う後置属格が十分発達したのが1650年頃だとすると、その時期まで内在格が維持されていたということになり、これは一般的に内在格付与が消失した時期よりもかなり遅い時期になってしまう。これらの点については今後の課題として継続的に調査・分析を行っていきたい。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。